



ベテラン技術者に聴く

インフラ施設整備の思い

株式会社 東京設計事務所／執行役員／東北支社長 古川修三



1. 人生の変換点となった仕事

私は昭和56年に株式会社東京設計事務所に入社し、今年で38年目になります。その間、主に水道施設の計画、設計を中心に業務を行ってきました。人の生活に欠かせないインフラ整備に貢献しているんだということに、改めて面白味と責任を感じるこの頃です。

わが国の高度成長期に整備してきたインフラ施設も、老朽化した施設の更新や統廃合が盛んに行われる時期になり、これからの技術は、単に造ればよいと言うものではなく、より使いやすく、持続可能な施設整備が求められる時代となりました。また、多種多様な時代の変化に、対応しなければならない状況の中で、私もその変化に柔軟に対応すべく日々努力しておりますが、今回の「ベテラン技術者に聴く」というテーマを受け、私自身の考え方が大きく変わり、人生の変換点となった業務を中心に経験談を紹介します。

2. 技術者としての転期

(1) がむしゃらに突き進んだ20代

もともと私は土木工学科出身であり、大学の授業では道路の設計などを学んでいましたが、ある時、上下水道施設に興味を持ち、“こんな施設を計画・設計して自分の思いが詰まった施設が稼働したら面白いな”という思いで、下水道研究室に入り、その延長上で現在の会社に入社しました。子供のころに興味を持った“プラモデルを作って自分の思い通りに動かしたい”という発想と同じです。

入社1年目は下水処理場の設計にかかわり、下水道も拡張の時代で流域下水道の整備が花ざかりでした。その後2年目からは、水道の業務をする部署に移動しましたが、やっていたことはほとんど同じで構造物の設計でした。この頃は、次から次へと押し寄せてくる仕事を若さにまかせて、片付けて行った時期でした。早く仕事を覚えて一人前になってやるという思いで、ポジティブ思考で仕事を進めることを心がけていました。

(2) 転機となった30代

30代に入り技術士資格も取得し、これからプロジェクトのリーダーになって頑張ろうと考えていたころ、海外業務に参加することになり、それ以降、現在までに海外業務にも携わることとなりました。

現在はTECI（ティイーシーインターナショナル）というTECグループの別会社が業務を行っていますが、当時は海外事業部であり、人材の交流は頻繁にやっておりました。もともと海外業務に強い関心はなかったし、語学力も拙いものでしたので不安がいっぱいでした。

私が最初に参加した海外業務は、JICAの無償プロジェクトでパプアニューギニアの首都ポートモレスビーにて、浄水場から都市の中心街に供給する配水池への送水管布設整備の調査、設計業務でした。現地調査、測量、配管設計、工事発注、施工監理までで、日本での一連の業務と流れは同じです。

パプアニューギニアは、地図の空白地帯がある国で、私が行った時は25年近くも前であり、オーストラリアのケアンズ乗り換えでも待ち時間を含め16時間くらいかかり、とても遠い国のイメージでした。しかし今では日本からの直行便もあり、観光旅行も盛んになっているようで、かなり当時のイメージとは違うようです。インターネットを見ると“人と自然が共生する「地球最後の楽園」成田空港からほぼ真南へ飛ぶこと6時間50分”と出てきます。

現地での事務所はポートモレスビー水道事業所に居候させてもらい、自分たちで現地調査を行い、測量は現地の測量会社に外注し、約3週間現地で業務を行いました。現地調査では、試掘調査は現地コントラクターに掘削の依頼をし、穴の中に自ら入って、埋設位置などの調査を実施しました。さすがに暑い国であり、穴の中では汗だくになり、時には数十センチくらいの大きなトカゲが穴に入ってきたりで、大変でした。また現地での仕事は期間も限られていることから、昼間は現場、夜は毎日20時過ぎまで資料の整理に追われ大変忙しかったのですが、今となってはいい思い出です。

休日には現地のスタッフが近くの小さな島でのバーベキューパーティー（写真-1）に招待してくれて、なかなか楽しい時間を過ごしました。



写真－1 休日のバーベキュー（右端が筆者）

現地調査では、日本とは違ういろいろな体験ができました。いまでも印象に残っていることは2つほどあります。1つ目は、現地の住民がかなり関心をもっていたことです。当然ですが知らない国の人がこんなところになにをしているんだろうという興味から、特に子供が集まってきていっしょについてくる。現地語、英語も拙いので、現地のスタッフが説明して対応してくれましたが、一番驚いたのは、こんな熱い国で、アスファルト道路の上を裸足で歩いていた人がいたことです。ほとんどの人はサンダルくらい履いていたのですが、その人を見ると足の裏の皮がほんとに2cmくらいあり、靴は逆に邪魔なんだと思いました。

2つ目は、軍隊護送車に乗ったことです。配水池への既存送水管は軍の敷地内に入っており、よくわからないまま門番のところに行き“日本政府の援助で水道管の調査で来ている。敷地内を調べたい”と言ったのですが、“いいからこれに乗れ”と言われ、鉄格子のついた護送車に乗せられ、車で10分くらい離れた軍の受付事務所まで連れて行かれました。どうなるんだろうととても心配になりましたが、事務所で丁寧に説明した末、たばこを担当官に見せて“一緒に吸うか”と言うと、突然態度が優しくなり“わかった、私がもとのところまで送ってやるよ”ととてもやさしくなってくれました。このような経験もしながら実感したのは、水道に対する思いが日本とは全然違うということでした。

日本では水道は出て当たり前、むしろ断水したり、カビ臭が出たりするととても住民は怒る。しかし当時のポートモレスビーでは、需要量に供給が追いつかないことと、古い老朽管を適正に更新できていないことから漏水が多く、時間断水をして供給しているのが日常でした。現に泊まったホテルでも水道水の出が悪く、少し茶色でこんなもんかと痛感しました。

現地の人を見ていると、きれいな水道水が欲しいというより、とにかく水が安定して出ることが一番うれしいことなのだということが目の当たりにしました。

設計が終わり、2年目には工事監理の補助として1週間ほど施工状況の確認のため、再度ポートモレスビーに行きました。日本人の現地スタッフがしっかり監理しており、良好な状態で工事が進捗している状況を確認できました。一番驚いたのは写真－2で、中心街主要道路に布設しているのですが、平気でりっぱな街路樹を伐採しており、この事業が最優先だということを実感し、改めて事業の重要性を痛感させられました。



写真－2 街路樹を伐採して送水管施工

（3）技術者として成熟した40代から50代

このような30代での体験を大切に、これまで以上に地域の社会環境の理解に努め、自分のスキルアップをさせることと、特に顧客（住民）が本当に何を望んでいるんだろうと常に考えながら仕事をしました。

3. 常に新しい経験を

我々水コンサルタントは水道、下水道の社会資本を整備することが仕事であり、人が使うための施設づくり、使いやすく持続させるための体制づくりを支援することです。頭の中ではわかっていたつもりでも、今回紹介したような経験をすることで、身をもってそれを実感できたことに感謝し、改めてこの仕事を職業にしてよかったと思います。私も60歳になりましたが、まだまだ未経験なことたくさんあり、これからもいろんな経験を積み重ね、また新しいことへの挑戦もしたいと考えております。今時の技術者はインターネットの普及により、昔と比べ格段に情報量が増え、また仕事のやり方もパソコンの進化により大きく変わってきており、情報の選択とスピード感のある業務消化が求められると思います。ありきたりですが、たまにはふと立ち止まって、ほんとうに顧客（住民）は何を望んでいるのか、自分はこの業務で何ができるんだろうと少し考えるのも大事なことでないかと思っています。